

風 狂

第52号

風 狂 の 会

詩

寒露

いしかわ鉄道

秋の健康診断

足

懶惰な礼拝所

溶ける星座

油紋——夢の記憶(1)——

大バーゲンセール

富永 たか子

出雲 筑三

高 裕香

北岡 善寿

高村 昌憲

長尾 雅樹

原 詩夏至

なべくら ますみ

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十六）

三浦 逸雄

エッセイ

『マラルメ先生のマザーグース』に酔う

地上の闇から光を放つ（三）

神宮 清志

高島 りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十八）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール

手弱女の衣はさびれ
杖にすがって秋桜
さようなら
今年の夏

コキアの赤も丸々太って
名残の茶の一服

少年を過ぎ
青年を過ぎ
分別あるわかものは
公達のようにさやかで
蔦の葉の茂みに消えた

三角帽子の顔をのぞかせ葛の花
土くさくてもいい
いのちがそっと立ち
そこだけが発光して
崩れかけた山道や
自活する野原の一隅で
誰かと語ろうと待つ

人々が遠のいていく
すぐそこにいたはずの人
うつら
うつら
誰も
さようならは言わないで...

シャッカシャッカシャン
轡に似た吊り輪が整列して
規則正しく鉄棒に当たっている

中の方にお進みください
そりゃその方がいい
でないと振り落とされそうだ

シャッカシャッカシャン
天井の扇風機よ 廻るな
お前は化けもの蜘蛛にそっくり

危険物を持ち込まないでください
よくぞ言ってくれた
この状態で持ち込んだら爆発だ

シャッカシャッカシャン
スピードは中速なのに
猛り狂う荒れ馬のいななき

次はひばり とアナウンス
それは洒落た駅名ではあるな
陽羽里は夢をみる

シャンシャーッ
お馴じみとなった馬車音と別れ
終着駅の越前鶴来に着く

一年に一度の健康診断

ここ数年の結果が良くない

うつ状態になる要因でもある

悪玉コレステロール増、肝臓数値高

白血球数減 心臓異常キュウ波

今年はプラス 高血圧と心筋梗塞の疑いだ

毎年 行きつけの総合病院で精密検査

数か月は食事に気を配る

たいていは経過観察になるのだが、

驚きの心筋梗塞の疑い！

確かに胸の圧迫感

時々 ドドドと急に流れ踊る感

健康で長生きは自己との戦いのよう

食前に生野菜を取り、塩分控えめ

散歩を多く ストレス減の生活

秋深まる朝日は、暖かく心地良い

今日も遠足のごとく

心はずませ 職場に向かおう

ぼくのはしたない希望の日々は
冬至から夏至までで
夏至を過ぎると希望は
日脚と共にだんだん薄らぎ萎む
秋にはすっかり葉を落とし
枯れたふりして寒い風のなか
こっそり芽を孕んでいる
一本の森の木で
毎年その繰り返しで齢をとっている
そんなかじかんだ考えを抱えて
年の瀬の並木道を歩いていると
人に連れられた小さな
死神とすれ違って足を止めた
本当は影として漂う死神ではなく
暗い穴である惨めな目つきが
死神を想わせる瘦せ犬である

元旦の挨拶に遠くから
「新しい年に足が生えて歩き出した」
と言って 来た人がある
それなら
わけもなく過ぎた去年は
足のない幽霊であったということか
去年がそうなら一昨年も
いや十年前も幽霊であったはず
ある年は足が生え
またある年は足がない
というのは可笑しなことで
やはり今までずっと足がなかった
と考えるのがよかろう
この先ぼくの時間には新しい
足らしい足が生えるだろうか
希望と不安が古くなった
蛍光灯のように瞬いている

宗教の力を恃む様になって来ると
 厳肅な礼拝の場所が魂を救います
 祈る行為とはまさに所定の言葉と
 所定の動作とで頭を一杯にします

困難な状況の時には考えないこと
 待たねばならない時にも同じです
 苛々した疑念を抱かないでいると
 高慢な忠告に憤慨しなくなります

神に忠告とか援助をお願いせずに
 自らの苦痛を整えて神に与えます
 礼拝の祈りには苦痛を軽減せずに
 心を解放しないものは無いのです

ところが心の解放を政治に利用し
 礼拝所を懶惰な集会所に変えます
 信者の布施で建てた施設も変容し
 肩で風を切る男が仕切っています

固定資産税を払っていないのなら
 信者以外の地域の人にも解放しろ！
 礼拝もせず空室だらけの施設なら
 礼拝所を地域の保育所に変更しろ！

打ち振える瞳の奥の滴る滲みは塩の涙
流れ落ちる花束は流砂の骸となる
血は陰陽に染まりながら黒炎をなぞる
融けた水脈の穴を辿り
めくるめく蓴菜の経路を彷徨して
赤い炎の銅線が遠く近く鏡を奔流する

蝶の鱗粉を撒き散らした銀光の波
紋章を巡らせて滴る裂けた脳漿から
夢の破片を拾って光脈の彼方を測る

空中を舞う火の玉の流麗な陰影から
混交する光の色の濁りの渦巻きは
迅速の炎舞を繰り広げて暗闇に消える

溶け出した日歴の隆盛の位置を確かめて
暗雲を吹き流して溶解する赤い旗

点在する砂紋の痕跡を探って
偏在する空間の座標軸を置換する

流れ滴る幻の溶鉱炉を透して
鉄屑の泥濘を空高く舞い上がらせて
応答する磁針の揺れに濃度を印す

溶けるものは溶けよ
命運のままに流れる星の矢のしたたり

煌く赤い燐光の瞬く星宿から
溶融する王冠の渦を天上に撒き散らす鳥影

それは泳ぐための海だったが
波間に石油の虹模様が浮き
その暗い桃色から白い泡が
沸き立ち消えていく際限なく
恐らくは何かよからぬ事態が
出来したのだ私の知らぬ間に
若者らが不意に渚に現われ出
水に飛び込んだが彼らもまた
除外されたのではないかと恐らく
不吉な報せから私と同じように
危険だ兎も角ここから離れねば
私はまだ岸边にいる妻に叫ぶ
石油の屍臭は今では覆い難い
私は妻と急いで入り江を去る
若い無心な泳者を置き去りに
津波は来ない嵐の兆しもない
だがやはりここでは起こったのだ
間違いなく途方もない惨事が
思えば虹とはつまり光の蛇
ならばその水子ではないのか
この腐海に無数に沸き立つのは
例えば異界のマリアの胎内から
異界のイエスが未然に搔爬され
今は虹の死体に過ぎない油紋が
神を墮胎した痛恨と安堵をただ
虚空に吐き続ける
そのような

デパート最上階 特設会場の大バーゲンセール

お洒落なもの きれいなものが沢山あり

あら！ 素敵とばかり

手に取ったものもいくつか

レジの長い行列の最後に並んで

ちょっとのあいだ冷静に

そうだ私は唯今就活中 ではない

終活中

今朝も好きだったいくつかの衣類を

思い切って処理してきたところ

でもこのセーターは欲しい

この靴も コートも

三途の川のほとりでは

あの世行きの人を待ち構え

着ているものを見分して

重い衣類を着こんだり

嘘を付いたり 悪いことをした人は

奪衣婆さんに着ていたものを脱がされ

深い三途の川を歩いて行かされるという

この有名ブランド ウール100%のスーツなら

閻魔さまの目を十分誤魔化せると思ったのに

これは化学繊維の最新コートだもの

生臭い毛皮のコートとは大違い

少々重くたって関係ない筈

行列が動き 私も少し移動する

目が覚めたような一瞬

抱えていたセール品のあれこれ

いけない！

もう何も買わないと決心したのに

すごすごと列を離れる

もう少し高いものを買って行こう

なんて 思い返した顔をして



三浦 逸雄 「墮落する男」 8号（アクリル・紙）

楽しい本を図書館で見つけた。「横浜市港北図書館」という手近な図書館に、こんな本が置いてあるなんて奇跡のような気がする。著者はフランス象徴派の詩人ステファヌ・マラルメ、翻訳は長谷川四郎、晶文社から一九七七年に発行されている。

なんといってもマザーグース、マラルメ、長谷川四郎という取り合わせがすごいではないか。長谷川四郎というひとは何度かお目にかかったことがある。東京世田谷の文学好きたちの集まりに、徳永直とともに参加されていた。徳永直はプロレタリア文学の代表的な作家、長谷川四郎はシベリア抑留から帰還された新進気鋭の作家、逞しい身体を持ち主でほとんどしゃべらないひとだった。じっと下を見て、畳の目を見詰めながら、ほとんど言葉にならない一言二言を発していた姿を思い出す。当時わたしは高校を出たばかり、将来に何も見えない頃だった。世田谷には文学者が多く住んでいて、こんな集會がよくもたれていた。折しも石原慎太郎が芥川賞を受賞して華々しくデビューしてきた頃だ。

長谷川四郎の長兄・海太郎は、牧逸馬、谷譲二、林不忘の三つのペンネームを使い分け、それぞれに人気をもった作家である。ご存知の『丹下左膳』は林不忘の作である。並外れた文才の家系であるらしい。長谷川四郎の『シベリア物語』に始まる作家活動は、のちに全集一六巻として結実している。その全集の宣伝文に記されている。「われらのごく身近に居る“ぼくの伯父さん”であると同時に、現代芸術の遙か天空に渦巻く一箇の星雲でもある長谷川四郎」とあり、この文は宣伝文とはいえ、なかなかよく出来ている。長谷川四郎の、当たりの柔らかい静かな文章には心惹かれる。

ステファヌ・マラルメは一八四二年パリに生まれ、詩人として、『エロディヤット』『半獣神の午後』などを創作した。象徴派の指導者として、また文学者、音楽家、俳優などが集まったサロン「火曜会」の主催者として、二〇世紀の文学への大きな扉を開いた詩人とされる。職業としては、リセ（高等中学校）の英語教師であった。それゆえにイギリスのわらべ歌である『マザーグース』を教材としていたことが、本書の誕生をもたらすことともなったのであろう。

ステファヌ・マラルメの詩は、わかりにくいということでも有名である。フランス・サンボリズムとなれば、フランス人がフランス語で読んでも難しいだろう。言葉というものを、その意味だけで使うのではなくて、言葉のもっている音楽性、色彩、雰囲気、響き、イメージといった諸々の要素を使いこなして、一遍の詩を創出している。これを翻訳するとなると、スペイン語とかイタリア語などのラテン系の言葉に移すのでも、七割くらいしか伝わらないかもしれない。これが英語、ドイツ語といったゲルマン系になると、半分も伝わるであろうか。それでもアルファベットが使われている言語ならまだいい。東洋の漢字中心の言語となると、翻訳はほとんど不可能ではないだろうか。しかしその困難に立ち向かって、生涯を献げた方が居られる。鈴木信太郎が生涯を献げて研究し、翻訳した『マラルメ詩集』が岩波文庫に収められていて、これによってわれわれは、マラルメという世界を望見することが可能である。

しかしその一方、われわれは音楽とバレエによっても、マラルメの世界に接近することが出来る。「火曜会」常連の一人であったクロード・ドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』がそれだ。この曲はそれまで聴きなれた音楽と異なり、メロディがあるのかないのか、リズムがある

ようなないような、ただ音の連なりが不思議な感覚で続いている。初めて聴いたときは、妙な感覚にとらわれたばかりだった。しかしだんだん聴いてゆくうちに、その不思議な魅力にとらわれて、陶醉感に浸れるようになり、それがたまらない心地よさとなった。一度これを味わうと、何度でも聴きたくなり、はまり込んでしまう。レコード解説によれば、これはマラルメの『半獣神の午後』に感動したドビュッシーが、そのまま作曲したものだという。解説にはつぎのように記されている。

「半獣神の牧神が真夏の昼下がり、夢と現実の狭間で笛を吹き、水浴びしているニンフ（妖精）たちと遊ぶ。彼女らを追い、腕の中に抱え、牧神は様々な夢と欲望を巡らせているうちに、ニンフは消え、牧神は再びまどろみ始める」

音楽には国境がない。このような形でこの音楽にどっぷり浸かると、あたかもマラルメの『半獣神の午後』がわかってしまったような錯覚にとらわれる。それはたまらなくいい気分なのだ。

もうひとつ「バレエ」では、天才ニジンスキーの創作バレエ『牧神の午後』がある。ニジンスキーはロシアのセルゲイ・ディアギレフのバレエ団の一員としてパリに乗り込み、話題を独占したバレエダンサーだ。ニジンスキーが登場するまで、バレエというのは、ミュージックホールで女の子が踊る「見世物」でしかなかった。それを一挙に芸術の高みに押し上げたのが、ヴァーツラフ・ニジンスキーである。高い跳躍が大きな話題となり、高く宙に舞い上がり、そのまま静止しているように見えたという。そのときニジンスキーはわずか一八歳であった。その他ニジンスキーについては神がかり的なエピソードにあふれている。ニジンスキーは二九歳にして心を侵され、天然の彼方へと飛び去り、精神病院に収容されて生涯娑婆に戻ることはなかった。

幾つかあるニジンスキーの創作バレエの中でも『牧神の午後』は有名であり、上演当時あまりに生々しい性的描写で、センセーションを巻き起こしたと伝えられている。今ではそうした演出で上演されはしないだろう。日本のバレエ団の公演がテレビ中継されたとき、それを録画してある。しかしニジンスキーそのひとのバレエは想像することも出来ない。映像というものはときとして、描いているイメージを失わせることがある。この場合もかなりいただけない。顔は人間で、四つ足の動物はどこことなく豹に似て、しっぽが付いている。その牧神が物憂げに寝たり起きたりする。その夢幻的な場面もどこか空しい。

マラルメの詩に音楽とバレエがあるように『マザーグース』にも音楽がある。『マ・メール・ロワ』がそれである。マ・メール・ロワとは、マザーグースのフランス語訳というけれど、この曲を聴いてマザーグースを理解することは出来ないし、想像することすらできない。この曲はラベルがピアノ連弾曲として作曲し、後にオーケストラに編曲している。「幻の指揮者」と言われたセルジュ・チェリビダッケがロンドン交響楽団を率いて来日し、各地で演奏会を開いた。この二〇世紀の奇跡ともいわれ、最高の指揮者を日本人のほとんどが知らなかった。それもそのはず、この指揮者はレコードが大嫌い、すべて生でしか聴かせないという固い信念を実行している指揮者だった。これでは日本で無名なのも当然かもしれない。千載一遇ともいうべき日本公演は、何処でも空席が目立ち、簡単に入場できた。わたしは当日売りの切符で最上の席を確保して聴くことが出来た。

その日のメインの演し物はブラームスの『交響曲第一番』で、その前に二曲ほど演奏し、その一つが『マ・メール・ロワ』だった。その頃のわたしは「甲状腺機能亢進症」という奇病に罹っていて、熟睡することが出来ない日々が続いていた。チェリビダッケの指揮によるロンドン交響

楽団の演奏は、すごいというレベルを超えていて、とくに鳴り響く音の深さに圧倒された。その別次元から響いてくるような音に、全身包まれているうちに、いつの間にか深い眠りに陥っていた。どのくらいの時が過ぎたのだろうか。ふと気が付くと、この世とも思われぬ天来の妙音が響く中、手に手に光り輝く楽器をもった紅毛碧眼の異国人たちが、揃って演奏していた。その中央に目を引き寄せると、指揮台の上でチェリビダッケが巨体を踊らせるようにしている。『マ・メール・ロワ』の演奏のほとんどが夢の中で過ぎていたのである。名人の演奏を前にして居眠りするの、最も幸せだという説がある。その通りだとすれば、こんな贅沢な経験もないものだ。

マラルメが子供たちに英語を教える教材として『マザーグース』を使っていたというのは、いかにも面白い。この本では『マザーグース』の詩の一つひとつに、マラルメが詩的解説というか、思い付きというか、思考を跳躍させるような言葉を書き連ねていて、興味尽きない。子供のための唄、つまりわらべ歌というのは、何処か残酷で謎めいている。『マザーグース』も何のことだかわからないような突飛な発想が目立つ。日本のわらべ歌でも、謎めいたものが多い。「ずいずいずっころばし ごまみそずい」にしても「かごめかごめ かごのなかのとりは」にしても、あれこれ解釈はなされているが、いまひとつわからない。

さて『マザーグース』にはこんなのがあった。

コック・ロビンを殺したのは誰？

わたしだわってスズメが言った。

わたしは弓と矢でもって、

コック・ロビンを殺したの。

死ぬのを見たのは誰？

わたしだわってハエが言った。

ちっちゃなお目めで、

わたしは死ぬのを見ました。

喪主には誰をしょ？

わたしだわってハトが言った。

失くした恋を嘆くのよ、

喪主にはわたしがなりましょう。

と、これなどはわかりいいほうだ。しかしどこやら不気味で、もうひとつわからないところもある。それでも妙に心に沁みってくる。何を隠そう、このわたしが心の平衡を失い、日常生活、社会生活に破綻をきたし、ある施設に囲われの身となったことがあった。二三歳の時のことだ。あれこれ治療を受けながら、われを失って彷徨った挙句、三か月ほどして自身を取り戻してきた。そうした日々の中、気の向くままに書いたノートが残っているが、ごく最初にこの詩を書き付けている。よほどこれが気に入っていたのだ。日常性を失ったわたしの心を、真っ先に慰めてくれたのがこの詩だった。しかも正確に思い出して書いている。頭脳の中の記憶装置とは別のところ

に仕舞われていたのだろうか。

わらべ歌というのは心のふるさとに違いない。だからよくわからなくても困らない。いっこうに差し支えないのだ。心の奥深く珍藏されて、ときに取り出して、別次元に遊ぶにはこんないいものはない。

さてこの本、一五六頁のごく可愛らしい本、夢がいっぱい盛り込まれているようなこの本を読み進めるうちに、欲しくてたまらなくなった。どうしても座右に置きたいと思って、調べてみたらとんでもない高値がついていた。とうに絶版になってしまったけれど、欲しいひとがまだまだ居る。こうした詩情を求める心がある限り、同胞は滅びない。それにしても、こんな夢のある本も近頃珍しい。借りた本だから、こんな深読みが出来たのかもしれない。所有は失うことでもある。無理して手元に置くには及ばない。（了）

『趙根在写真集 ハンセン病を撮り続けて』をめぐって

趙根在（チョウゲンジェ）が初めてハンセン病療養所の多磨全生園を訪れ、入所者の杉原さんを撮影したのは1961年のことだった。それから趙は20年以上にわたって全国10ヶ所の療養所に通い、寝食を共にしながら撮影を続けた。趙の生前に彼のアパートを訪れたことのある佐川修さん（国立ハンセン病資料館運営委員・多磨全生園入所者自治会長）によると、2万点以上のネガや紙焼き写真が雑然と箱の中に入れていたという。

趙の死後、2014年と2015年に国立ハンセン病資料館で催された写真展「この人たちに光を」のカタログの中で、夫人の齊藤君子さんは「夫は（略）多磨全生園の故金子保志さん、大竹章さん、佐川修さん、故山下道輔さんや栗生楽泉園の故弐雄二さん達と親交を深めることで、入所者の方の写真を撮ることが可能になったのだと思います。写真家というよりは、一人の人間として入所者に向き合おうとしたのだと思います」と綴っているように、趙の写真には常に温かさといのちに対する尊厳が満ち溢れている。重傷の夫に急須で水を飲ませている妻の優しい視線、羞じらいながら向かい合っている新婚夫婦、犬とたわむれる人びとや、母豚が産まれたばかりの子豚に授乳している様子を見守るひとの後ろ姿など、ごく普通の日々の暮らしを撮しだしている。入所者一人ひとりのポートレートも数多く撮影しているが、どのひとも凜としていて、モノクロームのコントラストも美しい。

わたしが資料館を訪れたときには、常設展示に趙の撮影した写真が大きなパネルとなって掛かっていた。タイトルは「舌読（ぜつどく）」だ。視力を失い、指先にも知覚麻痺のあるひとが、唇や舌先を使って点字を読むことを舌読という。趙の写真の中で舌読するひとは淡い光を浴びて、シルエットとなって浮かびあがっている。詩に親しんでいるひとがその写真を観て、まず頭に浮かべるのは伊藤桂一の詩「溶けた詩集」だろう。散文詩なので長いが全文を引用する。

溶けた詩集

伊藤 桂一

人間には、自分がほろぶ、と予感したときに、なにかをこの世に遺したい、とする欲求がある。私の場合はそれが一巻の詩集であった。名づけて「竹の思想」とした。生涯のまずしい収穫だったが、まずしいなりに、そこにこもる愛惜の重みを、私はこっそりとはかってみた。

けれども私は、まだほろぶところまではいたらず、どうやらまた明るみのさす方向へ歩みはじめていたのだ。生きていることは美しい責任だと思ったし、日日の新しい意味の解明のなかに、自身を正確に清潔に定着させていきたくかった。

そんなあるとき、少女から電話がかかってきて、いつかあなたの詩集を点字訳したけれども、あの本が磨滅してだめになってしまった、しかもたったひとりの読者のためにです、私はいま悲しいので、どうしたらいいかそれを教えていただきたい、とやってきたのだ。

それはその少女が私の詩集を六ヶ月かかってたんねんに点字に打ったもので、造本したのを見せられたとき、口絵まで入れてあってみごとなものだった。原本の詩集はペラペラだったのに、点字の詩集はアルバムほどの厚みがあった。私には点字は読めなかった。それにこの点字詩集

を読む読者には、装幀の色も挿絵もみえないはずである。そのことに私はいがたい感慨を覚えたのだ。

その詩集は、あるハンセン氏病の療養所へ寄贈されることになっていた。少女は自身の記した点字詩集が、多くの盲人に読まれることをひそかに願っていたのである。ところがたったひとりの読者のために、その詩集は一度読まれたきりで使えなくなった。点字が消えてしまったのである。

その読者は女性の盲患者で、点字訳の詩集をしきりに読みたがったが、点字をさぐるにも両手とも失っていたので、やむなく舌読したのだ。点字は病者の舌でけんめいにさぐられながら、舌に溶けてこころのなかへ溶け込んだが、そのかわり、もうだれにも読むことのできない、なにもないアルバムのような形の無の詩集が残ったきりである。そこに盛られていた詩のかずかずは失くなってしまったのだ。

私はその患者のわがままをうらんでいます。これはいけないことでしょうか、と少女はいう。でも患者は、一生に一度、舌で詩集を読みたかった、といているんです、と電話口でいう少女の声はふるえていた。

詩集はそれで喜んで舌に溶けてしまったんじゃないかと思う。多くの人にさぐられても、いつか点字は磨滅する。もう半ばはこの世を終えているかしの患者のなかに溶けていった詩集を、著者である私は惜しいとは思わない。思うことができない。あなたの気持はよくわかるが——と私は少女に答えた。しばらく考えていて少女は、そうですね、それでは私もそう思うようになります、といった。

眼もみえず、両手もなく、必死な舌がさぐってゆく点字の詩のかずかずが、読まれるにつれて失われてゆくその悲痛な奇術——無気味さをこえたその情景への幻想が、その後しばしば私の脳裏をかすめた。彼女はその詩からなにを得ただろう。二度とくり返しては読むことを得ないその詩からなにを得ただろう。寒い緊張のなかで、私は佇立し、詩を負うて生きて拓いてゆくことのむつかしさをいまさらに想うた。そうして飢えた暗い口をひらいて、点字の詩を待っている、無数の患者の姿を背後にみる想いがしたのである。

(詩集『定本・竹の思想』南北社)

この詩を初めて目にしたのは、ある講演会の資料に目を通していきだった。てっきりエッセイだと思って読み始めたこの作品が、途中から詩なのだと思ったときの驚きは今でも鮮明に憶えている。少女の情熱によって造られた分厚い詩集。そこに点字で打たれた詩人のことばが女性の舌によって味わわれ、体内に取り込まれていく。失われていった点字は彼女のうちで、どのような花を咲かせたのだろうか。

柔らかに溶け出し、消えていく点字はどこか官能的でもあるが、実際の舌読は点字が溶けてしまう前に、唇や舌が傷つき血が滲むという、まさに苦行そのものなのだ。歌人の金夏日(キムハイ)は『点字と共に』(皓星社)の中で自身の体験を次のように綴っている。

「五十音を打ってもらって、なめてみたんだけど、とにかく最初はなんにもわからない。そして、じっとやっていると肩はこるし、目は真っ赤に充血するし、涙はぽろぽろ出るし、唾液は出るし、すぐに紙はべたべたになってしまい、それで濡れても点がつぶれないような紙というこ

とですね、例えば絵はがきとか、カレンダーの表紙とかね、そういうものに打ってもらってやると、最初はなめらかなんだけど、そのうち、角が立ってきて穴が開くんだね、それでこうやっている（舌を出して首を振るしぐさをする）濡れてぬらぬらしてくる。いつものように、唾だろう、と思ってまだやっていたら、晴眼者が見て、わあ、おい血が出たぞと言われてね。舌の先から血が出ているんだね」

凄まじいものを感じるが、それでも舌読を続ける彼らの知に対する熱い思いには、深い感銘を受ける。なんと金夏日は日本語の点字だけではなく、その後、朝鮮語の点字も習得したのだという。

そして趙は療養所の中だけではなく、入所者たちが差別の撤廃や医療、生活環境の改善を求めて外へ向かい、集会やデモを展開していった様子も写真に撮っている。写真は1966年から1972年にかけてのものだ。1967年に新潟水俣病患者が損害賠償を提訴、1969年には熊本水俣病患者が提訴、さらに同年には水俣病、イタイイタイ病、三池鉱山の一酸化炭素中毒、森永ヒ素ミルク中毒、カネミ油症などの被害者による公害被害者全国大会も開催されている。この時期に日本中に吹き出した公害訴訟とも連動していたのかもしれない。水俣病は未だ完全な解決には至っていないが、ハンセン病にあっても、1947年から特効薬の「プロミン」での治療がすでに始まっていたにもかかわらず、患者の隔離政策「らい予防法」が廃止されたのが1996年、熊本の入所者によって1998年に「らい予防法意見国家賠償請求訴訟」が提起され、原告勝訴の判決が下ったのは2001年である。なんと長い年月を費やしたことか。

趙は1986年、53歳のときから自宅でハンセン病についての研究に専念。約5000冊に及ぶ本を集め、一日中書齋に籠もって読みふけていたという。しかし1996年に癌を発症。1997年6月24日、64歳で死去している。研究内容を自ら発表することなく、道半ばで亡くなってしまったのは大変残念なことだが、彼が撮り続けた療養所の人びとや風景は、今後ますます貴重なものとなっていこう。懸命に生きる人びとや、生き生きとした生活が確かにそこにはあったのだから。趙の写真はそのことの証明としても、わたしだけではなく、多くの人々の心の中にずっと生き続けていくことだろう。そして彼の作品を見るたびにハンセン病患者を理不尽に隔離し、人権を奪っていたことにも想いを馳せたい。そう思っている。二度と同じことを繰り返さないために。（了）

*参考文献

『趙根在（チョウグンジェ）写真集 ハンセン病を撮り続けて』（草風館刊）

カタログ「この人たちに光を 一写真家 趙根在が伝えた入所者の姿」（国立ハンセン病資料館編集・発行）

『新編 伊藤桂一詩集』（日本現代詩文庫・土曜美術社出版販売）

<http://d.hatena.ne.jp/elmikamino/20101003/p2>「記憶の彼方へ 舌読」三上勝生

<https://ja.wikipedia.org/wiki/水俣病>

第十五章 (一)

私が短靴の紐を結んでいる間に、そして私がこの意地悪な猿の様な放射線専門医から永遠に別れる間に、私自身と共にこの種の何らかの話の想像して下さい。私は再び曹長の配下になりました。精神力の高さは大変に良好な状態の中でしたが、横隔膜が弱っていました。勇気の問題はその疑問が確認される時に、単純な言葉として自任します。荒廃した戦場が意味しているのは、一度も見たことがないが話には聞いている鉄の数々の部品が、あなたが通らなければならない場所に大変な速さで往来していることです。これらの脚力は、そこからあなたを導くのを拒んでいます。その様な脚力に対して私は或る朝、一度か二度喇叭の不気味な音を聞きました。分遣隊が招集される運びとなりました。私の順番がやって来ました。上等兵として私は、砲兵と六人程の歩兵の先頭におりました。私たちは終わりが無い軍人の旅に出ましたが、大変に短いと感じられることもあります。歩兵たちは私にリュックサックと銃を預けて、次々に消えました。彼らが戻って来ないと分かると、私はこれらの品々を駅にいる司令官の処へ運びました。又は寧ろ、決して驚く顔を見せなかった伍長の処へ運びましたが、彼は私に言いました、「彼らは戻って来ないだろうな。あなたは彼らが何処へ行って欲しいですか」。もう一人の砲兵と私は、〈冷酷な制度〉によって地面を這わされる儘になっていました。簡単に言えば、光が入らず窓ガラスも無く、無言の人々で溢れた小さな列車は、その日の朝に襤褸小屋だらけの憲兵たちのいる村で、傍線を引いて勘定に入っておらず空腹になった私たちを下車させました。私は人間や馬たちの通過で磨り減ったこの地面に見覚えがありました。一日中足を引きずっていた私は、小さな谷へ降りて行き、泥に沿った茂みしか見ずに私が眠る草地の三角形を悪戦苦闘して見付けながらも、全員が似ていて同じ高さの処にある馬の尻に再び乗りました。私は食糧と葡萄酒を供給されました。憲兵たちは殆ど私に関わりませんでした。私は最早背後から押し出されないで済む地点から前線に近づきましたが、前方から射撃されました。私は散歩者になった様に一種の中立地帯を数キロメートル走り回りました。憲兵たちはさっさと姿を消していました。ゴンティエが私に与えていた諜報活動に帰った私は、前進する道路を横断している煉瓦造りの橋の上を、鉄道線路が通っているのを眼にしました。そこには私の場所があり、友人たちも居りました。私は、完全にびっこを引きながらそこへ走りました。私が知っている食糧・宿舎係の下士官は、鞍の上に私の荷物を運んでいました。私たちは所謂デ・クレ・シューヌの森の中にある道を通ってそこにいたのです。私はそこに、どんな風が吹いても開いて仕舞う段ボール箱の小屋を発見しました。季節は未だ九月になったばかりでした。私は樹木の下に幾つかの馬銜(はみ)を垣間見ました。偶然にも私は司令官とT大尉に出会いました。彼らは私には真剣で疲れた様子に見えました。これからの私はT大尉の命令で動くことを知りました。私は、明らかに軍隊の堅苦しさが無くて渴望していた会話が出来る様になりました。彼は私を射撃用の上等兵に任命しましたが、それは私を彼の人格に結びつけるための一つの方法でした。当面、私はびっこでしたし、その日の行進は翌日に傷痕軍人としての足を軍医に診せるものとなりました。それ故に泥だらけでしたがここの森での休息は、たっぷりと一ヶ月ありました。私は時折、砲兵中隊の連中と、取分けゴンティエと再会

しましたが、彼らの話は怖いものでした。怖いものは何も無いと見做していた若い中尉が、私には意気地のない様子を見せました。そして、何時も良く知っていて動じることのない私の心の平安を羨望しているとさえ言いました。この称賛は私を動揺させました。私は、それと同時に最も卑しむべき想像力による恐怖を覚えました。それは足が凍傷になって私の病気に加わったことから生じたものであるのか、確かではありません。しかしながら、勇気が無ければ決して多くの人間は存在しません。T大尉が、天気予報の仕事に真っ当な人々を任命しなければならなかったのもこの頃です。彼は私に言いました、「あなたと相談せずに私は任命しましたよ。私たちが持っている能力を合理的に使うことが重要ですからね。あなたは何時もびっこを引いていますし、あなたが適しているのはこの仕事です」。従って私は自分の要望に署名しましたし、私が認めなかった希望によってですが荷が軽くなった様に感じました。そして、その後間もなく、より一層機敏になった様にも感じました。

第十四砲兵中隊のこの親切な大尉は、小さな谷のもう一つの側に小屋を持っていました。私たち二人の間には泥の河しかありませんでした。しかし、読者は馬の腹が触れる程の泥の観念をお持ちになるのではないのでしょうか。泥と言っても絶えず打ち付けて、泡立っているかの如くです。泡だったそのクリームは恐らく何らかの観念を与えるでしょう。従ってその土地を知っていた人々は、耕すことが出来る様になるまでは大変に長かったに違いないと言っていました。事實は、泥が乾燥したそれらの場所では一種の石が出来ていました。植物を生長させたその土地は、泥でも砂でも煙でもない人間の産業を生むことになります。車で泥を運搬することは砂漠を物語りました。まるでアッティラ(1)の様でしたが、草原は最早馬たちが通れる場所ではなかったのを私はその時理解しました。第十四砲兵中隊の馬たちは従ってもう一つの斜面におりました。そして、その夜にはベアルン地方(2)の人々が「ピレネー山脈」とカナポリ民謡の「サンタ・ルチア」の合唱曲を歌っているのが聞こえました。それは一般的なことで良くあることです。しかし、彼らの声は一般的ではありませんでした。それらの歌声はお互いに不思議と親密になりました。そして一定間隔を置いてテノールの声が、他の人々によって声を上げていたかの如くに飛び出して来て、大空までそれらの音響を放って行きました。この友愛の感情は又ロシアの合唱曲からも聞こえます。親切な大尉が、屢々私を良く招待したのだと思われています。或る夜に、私は顔まで泥だらけになってランタンを持って到着した一人の人物を見ました。彼は又、小さな通知状も持っていました。翌日、私は親切な大尉に言いました、「もしあなたがその様な時刻に、又誰か使者を送り出しても、私はもう来ないかも知れません」。しかし、大尉は黙っていることなく言います、「何故ですか。それでは台所にいるだけで大変満足している臆病者になりますよ」。昼食の音が余りに取るに足りないものであることは見抜かれていましたし、社交場の音も同じです。フランシス・ジャムが友人であった中尉は、友人の本を私に読ませたがりました。中尉は、私がそこから考えたことを知りたがったに違いありません。私は中尉自身が考えたことを尋ねました。「私ですか。あなたは私がこれらの愚かな本を読むとは思わないでしょうよ」。その本は孤児の様に放って置かれた儘でした。アレル神父の上品さは可能であったものとして手本にされました。そして、私は選ばれた会食者として輝いていました。私はこの種の冗談には非常に才能があるだけです。しかし臆面も無く真実が時々示されました。戦争になる数ヶ月前に結婚させられた大尉は、休暇で帰還することを言いました、「私は知り合いでもない女性と結婚したのだ」。別の日には、「私は小さいが、大きな馬を持っていることにあなたは気付きました。

全く私は馬から落ちるのが怖いのだ。従って負傷者になると、この上なく滑稽だろうよ」。少し後になって、私が砲兵中隊に再び追いついた時、大尉は頭を負傷していて、一ヶ月も経たずに病院から戻って来ました。彼は私に言いました、「私は愚か者で負傷した。その日の朝、私は洗面器を持って避難所を出たのだ。敵の砲台の一斉砲撃があったのだが、幾つかの破片が私の処まで飛んで来た。私は洗面器を持ち帰ったが、その時に私が思ったことは、敵の意志を受け取って私は理解することであり、それが打ち勝つ自分を認めることになるということだ。私は洗面器を持って再び出掛けたのだ。そして私が頭に一撃を受けたのはその時である。その勇気について書けるのはあなただけだ。そのことを記憶に留めて置いてくれよ」。如何なる敬意も無く上官のことを語って来ました。大尉は言っていました、「敵は私を苦しめない。敵は自分の仕事をしていて、大変上手でさえもある。私を苦しませるのは私の上官たちである」。誰にでも語るべき話がありました。人々は自分なりの観念を持っています。しかし彼は、私が彼の地位に身を置かない一人であることを思い出させました。そこはシャンパーニュ地方でした。少佐は老いた雌鳥の様に電話機の前で呻きながら飛び上がっていました。「彼らは矛盾した数々の命令を私に与えているのである。彼らとは全て二人の連隊長だ」。私は言います、「電話帳の中で最も高齢で偉い人は誰であるのかを探さなければなりません」。このことは行われました。そして、それが軍隊的な解決だったのです。

これらの対話の中で親切な大尉は、穏やかな戦線の話をしました。或る将軍に関する話は、少しも一般的なものではありません。彼は砲兵中隊の処まで来ましたが、悟られるのが怖くて単なる歩兵に変装していました。その砲兵中隊は良く楽しんでいました。その大尉はこれと同じ戦線において、ドイツ人たちが自分たちの国であるが如く、列を成して散歩していた通りを遠くから見ました。しかし、そこは決して彼の戦線ではなかったのです。ところが何発かの砲弾を発砲する提案がなされました。その当時の戦争は、原則に倣って管理されていました。そして原則として隣の戦線に当てられた目標を、当方が発砲する必要は無いのです。それ故に討議し、相談しなければなりませんでした。それから何が行われのか、あなたはご存知ですか。関係のある戦線において十二発程の砲弾が用意されて、その大尉の大砲はそれらを発砲する許可を取りました。一人の砲兵が彼の前で発砲します。モールマールの戦線が地獄になった当時に、それは私がフリレイで行った考察を私に思い出させました。一本の道で、所謂森の中の道は、右側の戦線を制限していました。この道の向こう側は全てが静かで、一方も他方も同じでした。事実上、この同じ前線には我が軍の石切場があって、大変激しく攻撃されても大変上手に防いでいましたが、左側の戦線は百五十ミリ砲によって徹底的に砕かれたかも知れませんでした。私がこのことを指摘した時に、或る将校に言いました、「あなたは兎に角黙っていて下さい。歩兵はそんな考えは決してしません」。私はこれらの事例を自分で抑えます。この種の皮肉はかなり理解されていますが、尤も何も導きません。私は寧ろ、キャベツや葡萄酒や砲弾や色々な荷物を大変上手に教える管理された機械の様な人に驚く様に勧められました。何故ならこの世のどんな勇気をもってしても、軍隊では情報部の命令がないと何も出来なかったからです。しかしこの大尉はその上、優れた砲兵であっても何も尊敬されませんでした。彼は行動と同じ様に、その話にも大胆で無謀だったのです。

大尉は少しも好かれていませんでしたけれども、結局のところ私は恐らく彼が一番好きでした。彼が我々の森に休息を取りに来た時、彼は又私を招きました。そして彼は私の上官でした。

けれども、彼は階級のことを全く忘れていました。勿論、彼は命令と服従のけじめも、より一層適切につけていました。それから少し後で、私たちは先任者たちによって密かに備蓄していた砲弾をトーチカへ移さなければなりませんでしたが、司令官は勘定に関しては大変なペテン師でも知りませんでしたけれども、彼が極めて正確に砲弾を数えていたのを私は見ました。T大尉はこれらのことを簡単に、そして熱心に受取りました。そうしてこれ以上はもう考えませんでした。平時以来、T大尉は皮肉な仲間よりも遥かに早く進歩していたと私は思います。彼は芸術家でした。私が受取った簡素な絵葉書も彼を何時間も夢見させて、デッサンや絵画について際限無くお喋りをさせるのでした。芸術家としてのこれらのとりとめの無い話にも、大変平凡な混乱があっても私は驚嘆しました。そして、その正しい答弁を探しながら私は美学体系の輪郭を認めました。これらの幸せな時間も持つために私たちは戦場の多くの場所を移動しました。これ以上に最良なものは何でしょうか。補給用の貨車が死体を運ばない昼間に彼は、殆ど絵葉書無しでは過ごせませんでした。そして私が昨日夕食を食べた仲間も屢々一緒でした。ゴンティエは大目に見られていました。しかし、戦場の脅威は継続していて、彼の堅固な決意は当然でした。私が帰還してから少し後で、彼はフォンテーヌブローへ行って将校になることを受入れました。Wに関して言うと、私が不在の間に彼は隣村のヴィニエヴィルで殺されました。彼のことを考えると気が晴れませんでした。

この種の待遇以外では、私は殆ど炭焼き人や樵の様に生活しました。厚紙製の屋根を支える四本の杭と、一つの机と、幾つかのベンチを想像して下さい。そこで私は蠟燭が消えるまでチェスをして遊びました。揺らぐ微光が一本か二本の幹と泥濘の小道の始まりを照らしていました。この背景は私に二つの情景を思い出させました。一つ目は次のとおりです。砲手の服を着た一人の樵が両手で本を読んでいたが、私はその夜しか見ませんでした。私には、彼の本が私の本にしか見えません。というのもその主題については、私は決して忘れないことに決めているからです。(つづく)

(1) アッティラ (?~四五三) は、フン族の王 (四三四~四五三) でゲルマン諸族を征服して中央ヨーロッパを支配するが、カタラウヌム平原でローマと西ゴート連合軍に敗れた (四五一)。

(2) ポーを中心とする南仏の旧州で、今日のピレネー＝サドランティック県にほぼ一致する。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも づくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにはいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

②『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代

の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第52号

2018年11月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/124396>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124396>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト